

令和８年度茨城県教育研修センター第Ⅰ回外部評価委員会記録

日時	令和８年７月28日（火曜日） 午前10時から午前11時30分まで	
場所	茨城県教育研修センター101研修室	
出席者	【外部評価委員】 勝二 博亮 委員 植田 みどり委員 和嶋 延寿 委員（欠席） 渡辺 勝 委員 和田 幸哉 委員 植松 陽子 委員（欠席） 津賀 宗充 委員 佐藤 教子 委員 【茨城県教育研修センター】 所長 仲野 祐二 次長 佐藤 義一 次長兼教職教育課長 永尾 義江 企画管理課長 福田 純子 教科教育課長 森田 正彦 情報教育課長 小林 正士 教育相談課長 鈴木 昭夫 特別支援教育課長 阿部 富和 教職教育課主任指導主事 森江 邦和 企画管理課主任指導主事 川口 光政 企画管理課指導主事 畠山 崇	
次第	1 開会 2 所長あいさつ 3 出席者紹介 4 委員長・副委員長の選任 5 議事 〔報告〕 (1) 令和７年度事業実績（資料１） (2) 令和７年度外部評価委員会の評価結果（資料２） (3) 令和８年度事業計画（資料３） 6 研修講座参観 (1) 新規採用教員〔初任者〕研修講座（中学校） 第7日 A班 (2) 小学校理科観察・実験研修講座 7 閉会	

1 開会

2 所長あいさつ

3 出席者紹介

外部評価委員会委員及び茨城県教育研修センター事務局職員を紹介した。

4 委員長・副委員長の選任

委員長に勝二委員、副委員長に渡辺委員を選任した。

5 議事

〔報告〕

(1) 令和7年度事業実績（資料1）

(2) 令和7年度外部評価委員会の評価結果（資料2）

(3) 令和8年度事業計画（資料3）

事務局から資料1、2、3について説明後、次のような質疑応答があった。

（○は委員、●は事務局を表す）

○ 学校では、授業参観の後に、教員へのフィードバックを心がけている。センターでも研修後、丁寧にフィードバックしているため、教員は、研修に一生懸命取り組んでいると感じる。引き続き、参加者を主語とした研修を充実してほしい。

● 参加者を主語とした研修の構築に努めている。さらに、研修後のアンケートを丁寧に分析し、今後の改善点や方向性について、職員間で共有や確認をしていく。

○ 外国人児童生徒等の状況は、地域ごとに課題があると考えられるが、日本語の支援に関する研修は、どのようになっているか。

● 外国人児童生徒や日本語指導が必要な児童生徒が増加している現状を踏まえ、地域の課題としてだけでなく県全体の課題として捉え、今年度は新規採用の1年目の教員から日本語指導に関する研修を実施している。

○ AIを校務や授業で活用するということだが、実際にどのように活用するのか。

● 働き方改革で立ち上げた校務DXの講座では、茨城県が包括的に契約を結んでいるGoogle社のGemini等を活用して、校務にどのような組み込んでいくかということをベースに、講座を運営している。個別の種類のAIによらず、どのようなAIサービスでも同じような効果を得ることができるよう、基本的な使い方を大切にしている。授業では、主に児童生徒が活用するため、小学校低学年からの扱いが可能なスクールAIなどをベースに、活用事例や注意点を中心に取り扱っている。

○ 聴覚障害の教員が研修を受講する際に、情報保障と合理的配慮の観点から、手話通訳者の配置等について配慮することはできないか。

● 手話通訳等の情報保障については、基本研修などで保障が必要な受講者を把握している場合は、予算を計上して講座を構築している。希望研修や聴講などは、予算化が厳しい状況であるが、座席の配慮やICT機器を活用したUDトーク等の活用など、可能な範囲で対応していく。

- 学校事務職員の新たな研修について、構築の背景や目的はどのようなものか。
- 市町村立学校事務職員のコア研修は、定年延長が進む中で、5年から10年ほど悉皆研修の機会がないという課題を捉え、55歳を対象としている。専門的な知識を生かした学校運営体制の強化及び円滑化を図り、学校改善について持続的に取り組み、学校事務の共同実施組織の統括を行うなど、地域と連携・協働を主体的組織的に進め、組織の中核的（コア）役割の深化を図ることを目的としている。

- 育成指標の活用など、県教育委員会との連携について、進捗状況はどのようになっているか。
- 本年度、センターの主管課が、高校教育課から教育改革課に移管された。教育改革課が研修の方向性を示すので、課題の整理などについて連携を図り、年度末に報告できるように進めていく。

- センターとして教員養成の講座を運営し、受講者が増えているのはよいことだが、実際には、どの程度、教員になっているのか。
- 「いばらき輝く教師塾」に受講した令和7年度の大学4年生は約200人で、その半分程度が令和7年度教員採用試験に受験し、そのうちの約9割が合格した。

- 研修目標の3要素を実現するために、講師に理解を得ることが重要であるが、どのような取組をしているのか。
- 講義・演習等における依頼内容と講師の講義内容等との整合性を図るため、依頼時よりメールや電話連絡等により担当者や講師等との打合せを繰り返し行いながら講座構築を進めている。

- 採用後、初期の段階で退職してしまう教員を減らすために、どのような取組をしているのか。
- 初任者のメンタルについては、教育庁担当課とセンターで連携し、メール相談や来所相談を実施している。また、学年主任、教務主任、教頭、校長などが、メンタル的なケアをできるように研修を構築している。心や気持ちが折れて退職する教員が一人でも減るように対応している。

- 参加者が主語として学ぶ、特に探究的な課題を自分の研修課題として設定していくためには、事後の振り返りだけでなく、自分の学習課題を示し、事前課題に取り組む必要がある。復習だけでなく、予習をやっていくという意味では、オンデマンド等で事前に課題や教材を提供するなど、当日、課題意識をもって学べるような事前課題を設定することが重要である。（意見のため回答なし）

- 外部評価において、単年度については、報告や説明がされているが、前年度、どこまでできていて、どこまでできていないから、今年度はこうするなど、全体として、どこまで何ができたのかが分かる形で報告すると、次年度の改善方策等が明確になる。（意見のため回答なし）

6 研修講座参観

- (1) 新規採用教員〔初任者〕研修講座（中学校） 第7日 A班
- (2) 小学校理科観察・実験研修講座

7 閉会